

高村光太郎選集
5

高村光太郎選集
5

春秋
社

目次

隨筆	十二月八日の記	三
評論	戦時下の芸術家	八
評論	戦時の文化	一六
対談	東亜新文化と美術の問題（対談者 川路柳虹）	一八
詩	大詔渙発	四〇
	十二月八日	五〇
	鮮明な冬	五一
	彼等を撃つ	五三
	新しき日に	五五
書簡	昭和一六、一七年の書簡	五七
隨筆	子供の頃	五九
隨筆	某月某日	六六
隨筆	七月の言葉	七〇

隨筆	一夏安居の辯	三
詩	沈思せよ蔣先生	七四
	変貌する女性	七六
	夜を寝ねざりし暁に書く	七九
	独居自炊	八三
	仕事場にて	八三
	民国の民と兵とに与ふ	八四
評論	東大寺戒壇院四天王像	八六
評論	興福寺十大弟子	八九
評論	戒壇院の増長天	九〇
評論	唐招提寺木彫如来像	九一
評論	美の日本の源泉	九三
評論	照井瓊三著「国民詩と朗読法」序	九六
評論	朗読詩について	一〇〇
評論	与謝野晶子歌集「白桜集」序	一〇四
隨筆	希代の純粹詩人——萩原朔太郎追悼——	一二五

隨筆	あの頃——白秋の印象と思ひ出——	一七
隨筆	詩魔佐藤惣之助氏	二〇
隨筆	小野綾子歌集「刈株」序	二一
隨筆	八木重吉詩集序	二三
評論	詩の深さ	二五
評論	詩と表現	二六
評論	詩精神と日常生活	二七
評論	詩の進展	二三
評論	言葉の美しさ——日本の感覚——	二四
評論	詩の本質	二五
評論	戦争と詩	二四
詩	山道のをばさん	二四
	三十年	二六
	神とともにあり	二九
	少女よ	二五〇
	神これを欲したまふ	二五三

覆滅彼にあり	一五
寒夜読書	一五
監視哨	一五
あそこで斃れた友に	一五
突端に立つ	一五
われらの死生	一六
「まつた」を知らず	一六
ビルマ独立	一六
肅然たる天兵	一六
救世観音を刻む人	一六
フィリッピン共和国独立	一七
四人の学生	一七
戦に徹す	一七
昭和一八〇二〇年の書簡	一七
随筆 日本之母	一八
随筆 人意以上のもの	一八

評論	某月某日……………	一九〇
隨筆	乏しきに対す……………	一九七
隨筆	人類清濁の分るところ……………	二〇三
隨筆	卑俗との戦……………	二〇五
隨筆	嚴たり古代の心……………	二〇七
評論	野間清六編「埴輪美」序……………	二〇九
隨筆	ロダンの手記談話録……………	二一〇
評論	ドナテロ小感……………	二一六
評論	関義訳ブルデル「ロダン」序……………	二一九
評論	清水多嘉示著「巨匠ブルデル」序……………	二二一
隨筆	とびとびの感想……………	二二三
評論	彫刻その他……………	二二六
評論	美の中心……………	二三一
評論	能の彫刻美……………	二三四
評論	十大弟子……………	二三九
評論	天平彫刻の技法について……………	二四三

隨筆	仕事はこれから	二四九
隨筆	罹災の記	二五一
隨筆	日本婦道の美	二五三
隨筆	自信を以て起て	二五四
隨筆	平常心を豊かに	二五五
詩	陽春の賦	二五六
	必勝の品性	二六〇
	美をすてず	二六二
	保育	二六三
	古代の如く	二六四
	たのしい少女	二六五
	黒潮は何が好き	二六七
	南瓜賦	二六八
	美しき落葉	二六九
	力を知る	二七〇
	戦火	二七二

琉球決戦……………	二七
一億の号泣……………	二七
随筆 回想録……………	二六
解題 1 二代の回顧について……………	吉本隆明 三〇
解題 2 第五巻収録作品について……………	北川太一 三三

高村光太郎選集

第五卷（昭和一六～二〇年）

十二月八日の記

今度の第二回中央協力会議開会の当日は実に感激に満ちた記念すべき日となつた。丁度対米英宣戰布告大詔渙発の日となつたのである。

昭和十六年十二月八日、私は電車の混雑を避けるため朝早く家を出たのでラジオの放送を聞かず何も知らずにあの座席についてゐた。すると隣席の某新聞社の編輯長が、今朝の三時頃ハワイで戦争があつたと私に囁いた。さてとはじめて私は今日のただならぬ日であることに気がついた。話はそれぎりで詳しい事は何もわからぬ。開会予定の午前九時半が来ても政府側の人も閣僚も、議長の姿すらも席に見えない。議場にはもう或る空気が漲つて来た。千何百名かが一種の不安と一種の期待とでどよめきともつかぬどよめきの中に時刻の移るのを見てゐた。やがて後藤議長の壇上に棒立ちになつたのが見えた。議長の声が重く、ゆるく短かく議場にひびいた。時局は非常に重大なる事態に立ち到り、東条総裁は只今宮中に伺候致されて居り、開会不能につき、午後一時まで開会を延期するから、それまで各位は休憩せられて静かにお待ち願ひたいといふことであつた。しづかにお待ち願ひたいといふ言葉が妙に強く心に響いた。十一時に詔勅が発せられるといふやうな囁きがそこらに聞えた。人は多く控室に出たので議場は人影まばらになつた。私は議長席の両側にある大きな菊の插花を見たり天井を見たりしてゐたが、

やがて控室に引きあげた。大きなライトや写真機や録音機の台が議場の後方に数多く並んでゐる間を歩きながら、これは歴史的な時間だなど静かに思つた。控室に居ても誰も知つた人が居ないので、私は窓際の椅子に腰かけて晴れた冬の日のあたたかい丸の内の風景を見てゐた。ただうつけて見てゐた。何も頭に出て来ない。頭はただ一点にだけ向つて激しい傾斜のやうなものを感じてゐるだけであつた。二時間もあるままぢつとしてゐた。時計の針が十一時半を過ぎた頃、議場の方で何かアナウンスのやうな声が聞えるので、はつと我に返つて議場の入口に行つた。丁度詔勅が捧読され始めたところであつた。かなりの数の人が皆立つて首をたれてそれに聴き入つてゐた。思はず其処に釘づけになつて私も床を見つめた。聴きゆくうちにおのづから身うちがしまり、いつのまにか眼鏡が曇つて来た。私はそのままであつた。捧読が終ると皆目がさめたやうにして急に歩きはじめた。私も緊張して控室に戻り、もとの椅子に坐して、ゆつくり、しかし強くこの宣戦布告のみことのりを頭の中で繰りかへした。頭の中が透きとほるやうな気がした。

世界は一新せられた。時代はたつた今大きく区切られた。昨日は遠い昔のやうである。現在そのものは高められ、確然たる軌道に乗り、純一深遠な意味を帯び、光を発し、いくらでもゆけるものとなつた。この刻々の瞬間こそ後の世から見れば歴史転換の急曲線を描いてゐる時間だなど思つた。時間の重量を感じた。十二時近くなると、控室に箱辨と茶とが配られた。箸をとらうとすると又アナウンスの音が聞える。急いで議場に行つてみると、ハワイ真珠湾襲撃の戦果が報ぜられてゐた。戦艦二隻轟沈といふやうな思ひもかけぬ捷報が、少し息をはずませたアナウンサーの声によつて響きわたると、思はずなみ居る人達から拍手が起る。私は不覚にも落涙した。国運を雙肩に担つた海軍将兵のそれまでの決意と労苦を思つた時には悲壮な感動で身ぶるひが出たが、ひるがへつてこの捷報を聴かせたまうた時の陛下

のみこころを恐察し奉つた刹那、胸がこみ上げて来て我にもあらず涙が流れた。

午後一時、議場は既に人で一ぱいであつた。職員席や政庁席も追々にふさがり、やがて閑僚達が人を押しわけて揃つて入場した。東条総裁の決然たる面貌を私は遠くから凝視した。開会が宣せられ、宮城遙拝、皇大神宮遙拝が終ると、議場の中央から実に静かに詔書が議長の前に捧げられた。議長はそれを謹厳に、ゆるやかに、しかし淀みなく捧読する。議場には息の音もしない。個々の人影はまるでなくなり、ただ一団の熱氣の凝塊が感じられた。やがて英霊に対する感謝、将兵の武運長久祈念の礼があつてそのまま会議は終了し、つづいて総裁、議長、副総裁、情報局総裁の挨拶演説があつた。力に満ちた東条総裁の簡潔な挨拶はよく人の肺腑を貫いた。会議を今日一日で終ることの意味がつよく人を打つた。人は皆同じ決意に昂然とした。

宣言決議の案文が委員達によつて出来上ると、会議員職員等二千人にあまる人は四列縦隊を作り、米英膺懲の旗をなびかせて宮城前に行進した。宮城前には既に四方から団体の列が集つてゐた。順を追つて整列して、議長の宣言決議の朗読、国歌斉唱、副総裁のよくとほる発声に和しての万歳奉唱が行はれ、引きもきらぬ多くの他の行列の中を、冬の日の漸く傾く頃、再び議場に帰り、四五の議員の所感の披瀝があり、閉会の儀礼を終つて、この記念すべき忘れ難い一日の会議は散会した。私は負傷してゐる肋骨の痛さを他人事のやうに覚えながら、騒然たる数寄屋橋あたりの燈火管制の往來を歩きまはらずに居られなかつた。地下鉄で帰路につき、駒込林町の高台に上ると、まるで四十年前の千駄木山のやうにまつくらで、満天の星が大きく、近く、きらきらと光り、木星らしい抜群の巨星が昔太平洋の波の上で見た時のやうにエーテルの中にゆらゆらと揺れてゐた。

時局がかう一転してみると會議に提出した議案の如きは何だか昨日のもののやうな、そぐはぬ感じが

一時はしたが又考へてみると、時局の重大となるにつれて尚更その考慮の重大性も加はるわけで、これは忽せに出来ぬと今は強く思ふ。議案のいはれを、それゆゑ、此所に一応説明して置かう。

私の提出した議案は次の通りである。

議案「全国の工場施設に美術家を動員せよ」

提案理由「国民士気の昂揚に関し、全国に漲る工場従業員の精神的健康の有無は極めて重大である。国民士気の源泉は健康な精神生活にあり。健康な精神生活は身辺日常の健康な美の力に培はれることを看過すべからず。此の美を欠く時人心は荒廃する」

建設案「あらゆる大工場の食堂、休憩室、合宿所、病院等の設計に合理的な美を与へるため、夫々適當な美術家を動員して壁面彫刻、壁画、日用什具、びら其他の圖案並びに製作に従事せしめる道をひらくこと」

右の提案理由について今更くとい説明もいるまい。有史以前の時代から人間が美の力によつてその品性を養はれ、その精神の調和を整頓せられて来たことは、うつかり自分で氣のつかないほど常住不斷の事実である。美の本能は生理的、心理的、社会的其他あらゆる面にはたらいて、人間生活を健康に保ち、その進歩発展を容易ならしめ、此世に人間が生存することの意味を深め、高める役をしてゐる。朝起きて顔を洗ひ含漱をして、ああせいせいしたと思ふのも美である。さういふ單純な感覚上の美がいつのまにか最も深い精神上の美にまでもつながるのである。人は日常身辺の健康な美によつて無意識裡に力づけられる。その力が大きい。時局の重大となるに従つて日本全国は一つの大きな軍需工場となると言へる。工場の労務者の身辺にこの美の力が欠け、人間が人間である自覺を失ひ、單なる機械の部分品であるやうな感じを持つに至るほど恐ろしい事は無い。農山漁村にはまだ大自然があつて人を養ふ。工場

を唯乾燥無味な物質ばかりの処と人に思はせれば人は必ず精神的に墮落し、肉体的に廢頽する。機械の美に眼を開き、其を愛すること吾身を愛するやうに育つには、日常身辺の健康にして合理的な美にいとなく教へられねばならぬ。まるでこれと逆な条件のために心身荒廢の域に瀕してゐる実例が世に甚だ多いのである。

美術家の一つの役目がここにある。私は例へば厚生省のやうなところが此事を深く考慮して、實際的な規定をつくり、産業報国会のやうな有力な機関がその実行の促進にあたつて、美術界の諸団体を組織的に動員徴用し、大工場施設と美術家とを緊密に結びつける方策の立てられる事を熱望する。規定としては例へば工場建設費の何パーセントを美の領域に割当てる事、大工場には必ず美術家の顧問なり嘱託なりを置く事といふやうな簡単なもので足りるであらう。然るべき美術界の大家が指導し、中堅後進が實際の工作に当れば仕事は着々と進むであらう。国家総動員の今日、美術家は必ず勇躍して事に当るに違ひない。その巨細の方法工夫については衆智に諮るがいい。私も亦機会を得ていつかそれを述べよう。

〔評論〕

戰時下の芸術家

つひに来るべきものが来たのである。彼が路を開かないかぎり、正面衝突は免れないところであつた。今日から顧ると五年間の戦は將に來ようとする大戦の前哨戦であつたかの觀がある。化物の正体がいよいよあらはれたといふ感じだ。これからが生きるか死ぬかである。われわれはもちろん勝つ。勝たねばわれわれは既に居ないからである。これほど強いものは世に無い。

そのかはり、われわれは日本歴史に曾てなかつたやうな困難、緊迫、重圧の接線に脅かされる事を覚悟せねばならぬ。どういふ形でそれが来るか、それは來てみねば測り知れないほど深刻なものであらう。恐らく今日人がふつくさ言つてゐる生活上の窮屈などはまことにおめでたいものとなるであらう。

昔の人が身の皮をはぐといつた言葉をも超えてわれわれは生きるであらう。此の困難の向ふに光明はわれわれを待つ。それはわれわれの祖先が既に予見したことであり、又われわれに取れと命じた道である。今は事の理でもなく、物の利でもない。義と生命との問題である。

*

かういふ時にあたつて、国民各層の生活概念が一新せられねばならないのは当然で、又かういふ時に